

2022年5月15日（日）

宣 教 「再度の招き」

聖 書：ヨハネによる福音書21章15節～23節

みなさん、おはようございます。

本日5月15日は、先ほど祈りましたが、沖縄の施政権がアメリカ合衆国から日本に返還されて50年目になる記念の日です。沖縄の本土復帰の日と呼ばれます。現在、日本の米軍基地の70%が沖縄に置かれている不平等な現実があります。基地の負担は沖縄任せで良しとする、わたしを含めて本土に住む人々の考えを改めなければならないのではないかと思わされています。わたしが大阪の教会で洗礼を受けたのはちょうどこの年1972年であったことを後で知ったのでした。今年で50年になります。

さて今日の聖書の個所は、復活された主イエスは、3度目に弟子たちにその姿をガリヤラ湖畔で表されました。そして弟子たちと朝の食事を共にされました。

イエスの復活の時、新たに弟子たちへのイエスからの「再度の招き」がなされました。今日のイエスとペトロの会話の場面は、これから先を生きるペトロと弟子たいにとって決定的とも言える場面です。

◆イエスとペトロ

15:食事が終わると、：とありますが、他の聖書訳では「食事をとっていた時」となっています。原語のギリシア語では「食事をとっていた時」の方が近いようです。「食事をとっていた時」にペトロに向かってイエスさまが語ると、その会話を聞いた弟子たち全体がざわついて行くように思われるのですが、しかし、そこにいる弟子たちを大切にする思いを持って事柄をはっきりさせ、これからの弟子たちの歩みを整えるためにも弟子たちみんなに聞こえた方が良かったのかもしれないとも思いました。

イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、

この人たち以上にわたしを愛しているか」と言われた。

「ヨハネの子シモン、」という呼びかけは、昔からの親しい呼びかけ方です。イエスはペトロに「この人たち以上にわたしを愛しているか」と問われたのです。ここでの「愛しているか」という言葉は原語のギリシア語では、アガペーということばの変化形で、神さまの愛をあらわしています。混じりけのない100%の愛です。ちなみにギリシア語には、愛という意味のことばが複数あり

ます。

ここを含めて今日の個所では、イエスがペトロに3度「わたしを愛しているか。」と問われています。このことがポイントなのです。

イエスからの「愛しているか。」との問いかけに対して、ペトロが、

「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたをご存

じです」と答えています。ペトロが「あなたを愛していることは」と言っているこの「愛」という言葉は、神の愛を表すアガペーではなく、友情などを表すことば、「フィロー」ということばなのです。イエスはペトロに「わたしの小羊を飼いなさい」と言われました。

次にイエスの2日目の質問です。

16:二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛して

いるか。」1回目と同じ質問です。「愛しているか」の言葉は原語で神の愛を表すアガペーです。

ペトロは「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたをご存じです」と2度目のイエスの質問に対する返事をしています。

「愛している」ということばも、友情などを表すフィローということばです。

イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われています。

イエスの1度目はペトロへの言葉は「わたしの小羊を飼いなさい」で、この2度目は「わたしの羊の世話をしなさい」。「飼う」から「世話をする」になっています。羊に餌をあげたり、育てたり、外敵から守ったりさまざまなことがあります。

いよいよ3回目です。

17:三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛して

いるか。」注目すべきことは、ここで「愛しているか」との言葉は、日本語ではイエスが1度目、2度目の問いかけに使っていた神の愛を表すアガペーではなく、ペトロがイエスの問いかけに2度使っていた「フィロー」なのです。イエスの3度目の問いかけにはペトロがイエスへの返事として2度とも使っていた「フィロー」ということばが使われたのです。

つまりイエスはペトロに対する言葉づかいをアガペーからフィローに変えられたということです。イエスはペトロに近づいて行かれたのです。先に疑い深い弟子であったトマスに近づいて行かれたように、ペトロに近づかれ、イエスとペトロ、わたしとあなたという関係を再構築、心と心の結び直しをされたのだと受けとめるのです。

このイエスのことばの変化がペトロに、ペトロに大きな心の変化をもたらしたのです！

ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなったのです。

イエスのことばによって、ペトロは、イエスが十字架につかれる前に、大祭司の中庭で、三度「イエスを知らない。」と言ったことを思い出し、気づかされたのだと思います。マルコによる福音書 14 章 66 節～72 節（p94）。

イエスの言葉に触発されて、ペトロは隠していた自分の気持ちが表に出て来たのだと思います。イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなったのです。イエスを 3 度もしらないと拒絶した自分自身に悲しくなったのだと思うのです。ペトロは困惑して、自分の弱さを知ったのだと思うのです。

そしてペトロは、「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」と語るしかありませんでした。でも、それで良かったのです。イエスは言われました。「わたしの羊を飼いなさい。」と。弱さを知ってこそ行える働きがあるのです。ペトロはイエスの前に自分の弱さを知り、それを認めるところから主イエスから羊飼いの働きをたくされたのです。これはイエスによる再度の招きです。

18:はっきり言うておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」と。これはペトロの殉教の死を示しているを受け取られています。

わたしは、今回ここを読んだとき、かつて県立淡路医療センターで下腹部を切る手術を受けた時のことを思い出しました。手術台の上にのぼったらもう何も自分から動かせませんでした。服を着替えさせてもらい、手を広げ、なされるがままです。

「行きたくないところへ連れて行かれる。」と。でも神に祈り、後は医者任せれば賛美歌 90 番が心に響きました。「ここも神の御国なれば 天地 御歌を 歌い交わし・・・」

ペトロについては、その後、キリスト者への迫害の厳しかったローマで十字架に殉教の死を遂げたとの伝説があります。主イエスのことばが実現したと理解されるのです。また今日のカトリック教会の教皇は、ペトロから始まっています。

実はイエスの言葉は、ペトロー人だけではなく、弟子たち全員に向けて語られた言葉のように思えるのです。

19:ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そ

うとして、イエスはこう言われたのである。

神の栄光とは苦難の中に輝く、光だと思えます。愛と熱がほとぼしり全地を包むのです。このように話してから、

ペトロに、「わたしに従いなさい」と言われた。

わたしたちは、これから先、どのように死に向かって生きて行くのでしょうか。最近、現代の霊的指導者と言われるカトリック司祭のヘンリ・ナウエンの「死を友として生きる」という慰めの本が出ました。わたしも少しずつ読みながら学んでいます。

イエスの「再度の招き」ということで、以前お話したことがあるのですが、「パ」という言葉についての話をお伝えしたいと思い出したのです。

「脱構築」という言葉で有名なジャック・デリダというユダヤ系のフランス人の哲学者がいました。以前、作家ブランショの解釈の本で「境域」というタイトルの本が出版されました。

その中に「パ」という論文があります。発音は日本語では「パピプペポのパ」のパ、「ゲー、チョキ、パーのパ」です。この「パ」とはフランス語で「歩み、足音、戸口、海域、峠、隘路（あいろ）」などの意味があるそうです。この言葉から「ついていく」という意味が浮かびあがると言われます。わたしには、聖書の「イエスの後について行く。」と重なりあうと思えるのです。ところが、この「パ」は、もう一つ、否定の「ne(ヌ)」と一緒に使用され、発音はやっぱり「パ」と読まれるというのです。ややこしいのです。同じ「パ」に肯定と否定、「はいといいえ」の内容があるということです。言葉遊びのようですが、「従っているようで従っていない自分」「イエスの後について行っているようで、そうでない自分がある。」というわたしたち人間の姿が暴かれるかのようです。

「自分が好きですか?」「はい いいえ」と応える自分はいませんか。両方とも「パ」なのです。自分なのです。人間なのです。しかし、ありがたいことには、イエスさまは「ついていけないかのような自分」を受け入れてくださっている方なのです。

それは、私自身であり、イエスについて行こうとする、行こうとした一人一人でもあるのです。復活された神の子イエスさまは、弱さを知ったペトロを再度「わたしに従いなさい」と招かれたのです。イエスさまは弱さを知った者たち・わたしたちを招かれる方なのです。

その招きはこの世の一步一步、そして天の御国にへと確かにつながる道なのです。

主の平安を祈ります。